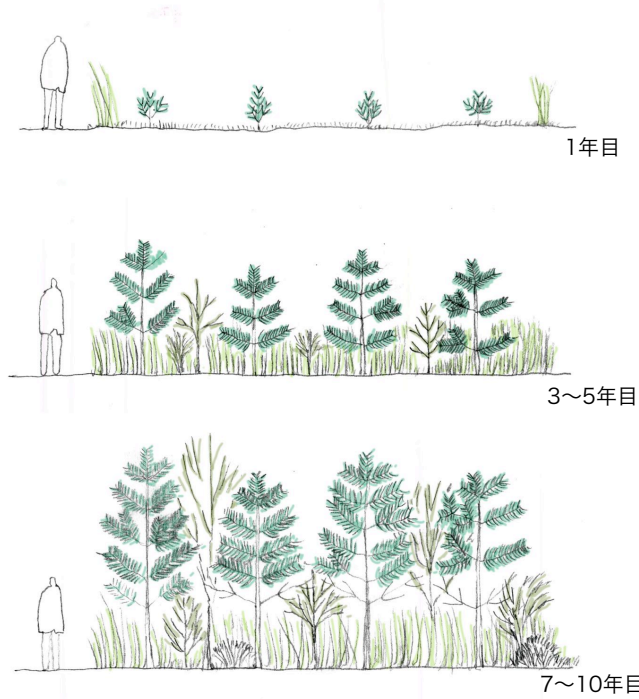


ランドスケープ

「大串半島活性化施設のランドスケープ設計は、この場所に昔から生育していた植物や樹木を植え直し、国立公園にふさわしい姿に時間をかけて戻していく」ことを設計趣旨としています。

地域性種苗による茂み



多種類の苗木を混植し、樹林に育てるイメージ

建築へのメインアプローチ左手に設ける茂みは、かつてあった岬の尾根の緩やかな丘地形に戻し、地域在来種で種の履歴が地域自生のもの（地域性種苗）により樹林に育てていきます。先導植物としてマツ苗木とススキ（移植）を植栽し、初期の基盤となる景観形成を行ないます。今後この基盤の上に、地域性種苗による多種類の苗木を生産、混植し、樹林の育成管理を行なっていくことを意図しています。

草はらとしての芝地



茂み以外の植栽地はノシバによる芝地を作ります。芝地は「芝生」としてではなく、国立公園であるこの場所にふさわしい、地域固有の生物多様性の向上に寄与する「草はら」として、ある程度粗放管理でノシバに自然植生の草本類が混入してくることを許容し、混入してくるものうち地域在来種を残し帰化植物を除草します。大串半島活性化施設の特徴となる自然性の高い景観づくりの基盤となる草はらを育成する意図としています。



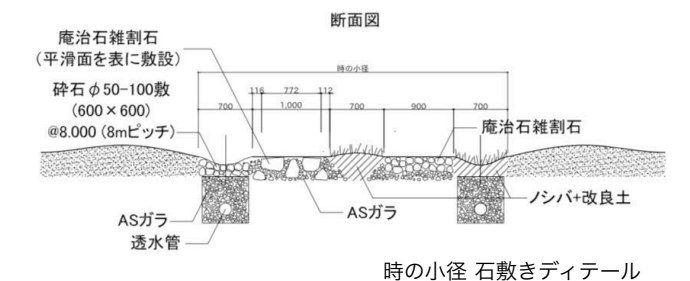
- ①芝生広場
- ②茂み
- ③芝生の前庭
- ④草つつみ
- ⑤石の庭とボスケ
- ⑥石積み
- ⑦時の小径
- ⑧海の小径
- ⑨裏の小径
- ⑩テアトロンへのルート
- ⑪公衆トイレ（既存）

ボスケ（眺望をフレーミングする樹木群）



建築と自然景観とのバランスを高める、瀬戸内海への眺望フレーミングを強調する、木陰を提供する等の役割をボスケが担います。ボスケの高木も地域性種苗で景観をつくる原則に則り、かつ当初からある程度の樹高が求められることから、地域に自生する樹木を「山採り」の手法で移植します。施工中も継続して候補樹を探索し、最適樹を植栽します。

地場産石材を活用したディテール



本施設のランドスケープ設計は、地域内で手に入る地域らしい素材を活用したディテールのデザイン考案、また撤去物の再利用、建設材料運搬距離の縮減等を通じた建設工事プロセスにおける省エネ、省CO2、環境保全への貢献に配慮しました。地場産石材である庵治石を多用し、現場発生アスファルトガラを舗装基盤として再利用した石敷き、現場周辺に保存されていた石材を活用した石積み、石段（階段）等を設計し、この場所ならではの景観創出と環境保全を図ります。石工事においては施工中にサンプル施工を行ない、機能性の確保を行ないます。例えば、断面図の右の舗装は車椅子がスムーズに往来できる石敷きを意図しています。

建築

瓦の大屋根とスギ大和貼りの外壁

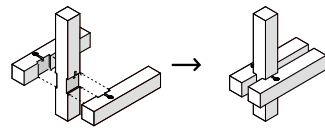


屋根には淡路瓦を用います。遮音性、遮熱性、耐塩害性に優れた「性能」と人々の情感、記憶、原風景に影響を与える「情緒」を兼ね備え、風雪に耐えて生き残ってきた素材です。外壁にはスギ材を用います。抗カビ性、抗害虫（シロアリなど）性に優れた赤身板を互い違いに貼る「大和貼り」とすることで、交換ができるようにします。スギ材はやがてグレーに風化し、それは風景に馴染み、美しい経年が見られるでしょう。適切なメンテナンスを続ければ半永久的に持続する外装です。

大空間を支える挟み梁

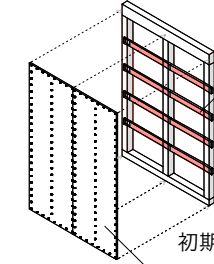
間口9.10m×奥行7.28mの大空間となる広間は、嵌合接合による挟み梁と吊り束によって支えられます。木材は大断面の集成材等はいわずに無垢の木そのものの風合いを生かします。これらは、予め一部を地面で組み立て、吊り上げる「地組みによる揚重」によって設置されます。ダイナミックで感動的な建て方になるでしょう。大空間を支える東西面の壁の一部には通し貫を配置することで、本来の木造らしい、より粘りのある構造となります。

嵌合接合部



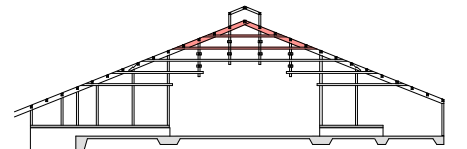
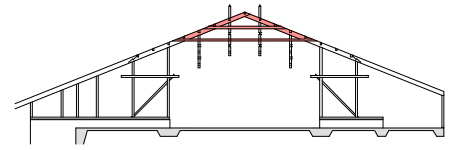
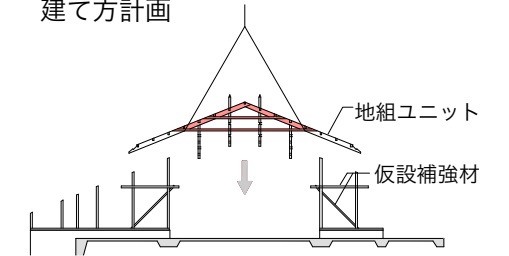
木材同士のめり込みを活かした粘り強い接合部

通し貫を併用した面材耐力壁

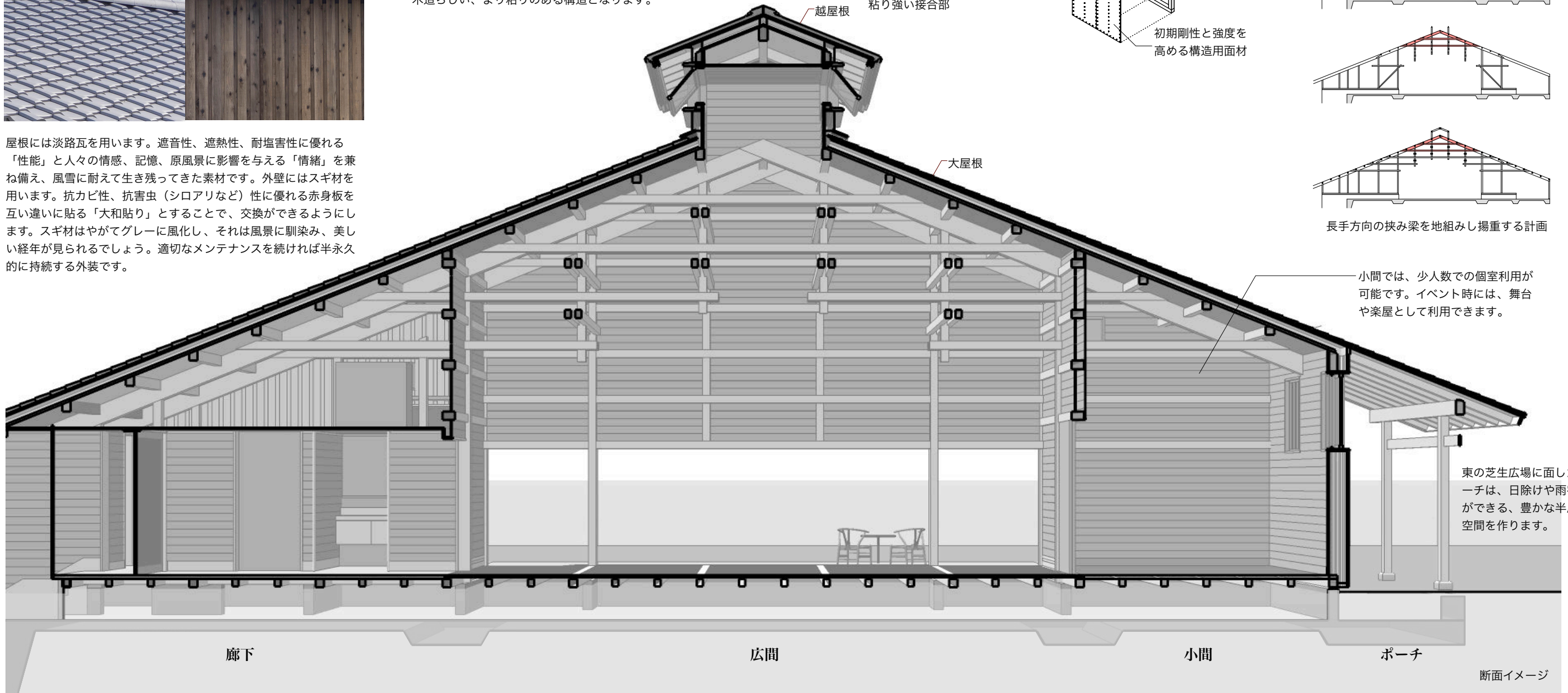


高い変形性能をもつ通し貫
初期剛性と強度を高める構造用面材

建て方計画



長手方向の挟み梁を地組みし揚重する計画



小間では、少人数での個室利用が可能です。イベント時には、舞台や楽屋として利用できます。

東の芝生広場に面したポーチは、日除けや雨宿りができる、豊かな半屋外空間を作ります。

廊下

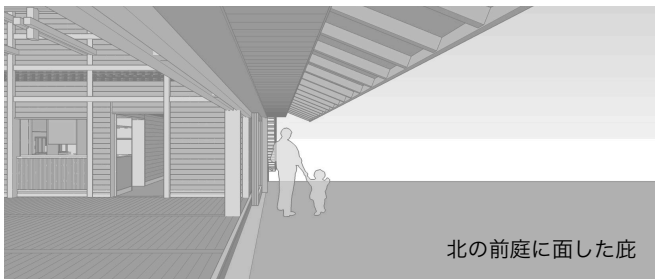
広間

小間

ポーチ

断面イメージ

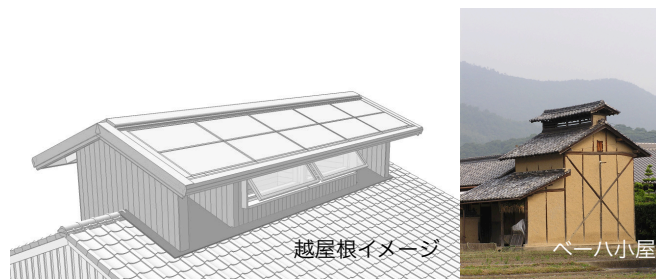
たっぷりとした軒下空間



北の前庭に面した庇

前庭に面した「北側の庇」は、日差しや雨から開口部を守るとともに、室内から眺める風景をより際立たせます。茂みに面した「南側の庇」は、夏場の直射日光を遮り空調負荷を軽減し、省エネに寄与します。東側のポーチを合わせた、南・北・東の3面の軒下空間は公園利用者の拠り所となるでしょう。

越屋根と太陽光発電パネル

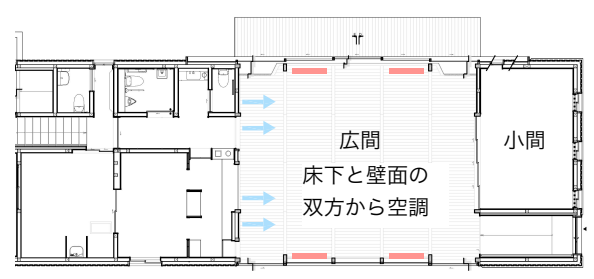


越屋根イメージ

へー八小屋

讃岐の原風景を思わせる「へー八小屋」には、効率的な自然換気を促す越屋根が設けられています。本建物にも越屋根を設けるとともに、太陽光発電パネルを設置することで、家庭菜園で野菜を採るように電気の一部を自給します。環境を制御する機能と性能、伝統と現代の共存の象徴となることを期待しています。

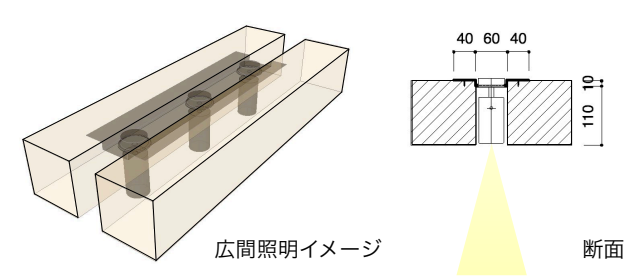
安定した温熱環境を生む断熱・空調計画



広間
床下と壁面の
双方から空調

ここでは、生の風景や自然の音を存分に楽しんで頂きたいと思います。そのため、1年のうちできるだけ長い期間、大開口を開けた状態でも不快でない温熱環境を目指しています。建物に高い断熱性能と熱容量を持たせることで、輻射熱による温度体感を向上させ、外気温の変化に左右されにくい安定した環境を作ります。

挟み梁を活かした照明計画



広間照明イメージ

断面

挟み梁の隙間に照明器具を設置することで、必要な光だけを感じさせるような計画としています。まるで広間を支える梁と東のみが浮いているように見るとともに、一番のごちそうである瀬戸内の風景を妨げない演出を可能にしています。イベント時などにも対応できるよう、広間の照明は調光できるようになっています。